

双葉町の歴史を救う、守る、伝える

－ 双葉町文化遺産保全活動・12年の記録 －



双葉町・双葉町教育委員会
筑波大学図書館情報メディア系

ごあいさつ



双葉町長
伊澤 史朗

平成23年3月11日に発生した東日本大震災および東京電力(株)福島第一原子力発電所の事故から、まもなく14年の歳月が経とうとしております。この間、双葉町では、復興事業を推し進めるとともに、貴重な歴史資料の救出や、東日本大震災に関する資料の保全にも努めてまいりました。特に、筑波大学様におかれましては、文化財の救出・整理にあたり多くのご指導・ご協力をいただき、心より、感謝申し上げます。

本パンフレットは、双葉町の歴史や文化を知るためのガイドブックでもあります。手に取ってくださった皆様にとって、当町への認識を深めるための一助となることを期待しております。

令和7年1月

歴史の重み

あたり前に過ごしていた日常が、一瞬の内に崩壊し、タイムスリップさせられたように故郷を追われ、別な土地で生活が始まった時、改めて双葉町の歴史の重みを感じ「歴史がここで途切れてしまうのだろうか。」と不安と悲しみがこみ上げてきました。未曾有の自然災害と原子力災害により、町の歴史の歩みが一旦止まってしまいましたが、過去を伝え、震災アーカイブの記録と記憶を残すことが、この歴史の重みを繋ぐという後世に伝える重要なミッションと考え、このパンフレットの作成に至りました。まずはこのタイミングで文化財救助と保護活動を中間報告としてまとめ、広く双葉町の歴史を発信出来れば幸いです。これまでご教授頂きました筑波大学の白井先生をはじめ関係各位に御礼と感謝を申し上げたいと思います。

双葉町教育委員会教育長 館下 明夫

過去を伝え、今を残し、未来に生かす

東日本大震災から約14年が経ちます。この間の、復興と新たなまちづくりをめざす双葉町の御努力に心から敬意を表します。筑波大学図書館情報メディア系では、私たちの社会が抱える膨大な知識を多くの人々と共有できる仕組みを考え、知識の活用をめざす教育・研究に取り組んでいます。被災した文化財を救出し、また復興へ向かう町の記録を残そうとする双葉町の活動は私たちの心を揺さぶり、御協力できることがないか模索しました。平成25年(2013)6月、双葉町教育委員会と私たちの連携事業が始まりました。私たちは、ふくしま歴史資料保存ネットワーク、茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク、そのほか被災地の文化財レスキューに従事する全国の仲間たちとともに、町内の文化財や避難生活の記録を保全し、その全容解明に取り組んでいます。ここで未発見の歴史資料や今後の災害教訓につながる記録が多数確認されました。これらを中間報告書としてまとめることで、復興の未来へ歩む双葉町の方々にとって心の拠りどころとなることを御祈念申し上げます。

筑波大学図書館情報メディア系 教授 白井 哲哉

凡 例

1. このパンフレットは、「福島県双葉町と国立大学法人筑波大学図書館情報メディア系との震災関係資料の保全および調査研究に関する覚書」(平成25年6月1日締結)に基づき、双葉町役場および町民の未曾有の被災経験にかかる記憶や記録の保全活動に関する中間報告として作成された
2. この保全活動は、東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所事故以降に双葉町で作成・収受された文書・記録・資料等のほか、双葉町の求めに応じ町内で救出された歴史資料・古文書を対象とした。
3. パンフレットの編集・執筆は、双葉町教育委員会生涯学習課と筑波大学図書館情報メディア系白井哲哉研究室が共同で行った。
4. 掲載写真は上記両者の提供による。一部の写真は所有者の承諾を得て掲載した。
5. 協力機関等および協力者の一覧を裏表紙に掲載した。

双葉町について

双葉町は、福島県の東側に位置する自治体です。北は浪江町^{なみえまち}、南は大熊町^{おおくままち}に隣接し、町の面積は51.42平方キロメートル、このうち28.72平方キロメートルが林野です。町の西側に阿武隈高地^{あぶくま}があり、そこから東西に細長く伸びるような形で丘陵地帯が町内に分布しています。

町の西から東に向かって前田川が太平洋へと注いでおり、その支流が町内をめぐっています。海岸沿いの南北には砂浜が広がり、そこに双葉海水浴場が開かれていました。双葉海水浴場は町を代表する観光地の一つで、平成18年（2006）には環境省による快水浴場百選の一つに選ばれました。

双葉町域は歴史的には標葉郡の中心地の一つとして栄えてきました。古代には郡山地区^{ぐんが}に郡衙（郡役所）が置かれたと考えられており、近世には長塚地区^{ながつか}に中村藩の陣屋（代官所）が置かれました。また町の中央部には相馬と水戸を結ぶ陸前浜街道^{しんざん}が通り、街道沿いの長塚地区と新山地区には宿場が置かれました。そして、明治時代になると町を横断する形で常磐線^{じょうばん}が敷かれ、長塚地区に長塚駅（現在の双葉駅）が設置されました。現在はそれと並走する形で国道6号と常磐自動車道^{じょうばん}が町の南北を貫いています。

双葉町は稲作を中心とする農業地帯でした。その後、昭和42年（1967）に、町の南東に位置する東京電力福島第一原子力発電所の建設が始まると、次第に首都圏へのエネルギー供給地帯として転換していきました。

東日本大震災および原子力災害が発生した当時の世帯数は2,606世帯（平成23年（2011）2月28日時点）、人口は7,140名（同3月11日時点）でした。原子力災害による全町避難を経て、令和6年（2024）11月1日時点での世帯数は2,199世帯、住基人口は5,316名（町内の居住者は173名）です。しかし、多くの住民は現在も全国各地で避難生活を続けています。



双葉町の航空写真（令和3年撮影）



双葉町の歴史

原始

双葉町域では約15000年以上前の旧石器時代から人々の生活が営まれていたことが、山田地区の手子塚A遺跡から出土した石器より判明しています。縄文時代(約15000年前～紀元前4世紀ごろ)の遺跡としては、福島県内でも最古級の貝塚である郡山貝塚(約6000年前)が代表的な遺跡で、縄文時代の人々の生活が分かる資料として貴重な事例となっています。

弥生時代(紀元前4世紀ごろ～紀元後3世紀ごろ)になると、稲作が九州地方から東北地方まで広がりました。双葉町内で当時の水田跡は現在のところ確認されていませんが、稲穂などを摘み取る際に使用する石包丁が町内の遺跡から出土しています。

古代

古墳時代(3世紀後半～7世紀)、町内では多数の古墳・横穴よこあなが造営され、現在確認されているだけでも500基以上の存在が判明しています。特に国指定史跡である清戸迫横穴きよと せきよこあなは全体で300基以上の横穴墓が確認されており、この数は東日本最大級ともいわれています。

奈良・平安時代になると律令制度が整備され、各地には国・郡ぐんが設置されました。双葉町域は標葉郡しおはに属しており、この標葉郡の役所と推定されているのが、郡山地区の郡山五番遺跡です。郡山地区に所在するほかの遺跡からも役所との関連が考えられる遺構や遺物が確認されており、周辺が標葉郡の中心部として整備されていたようです。

中世

平安時代(794年～1185年)後期には武士が台頭し、現在の双葉・浪江・大熊町、葛尾村一帯は、海道平氏の一族と伝わる標葉氏が治めていました。標葉氏は現在の浪江町に本拠を構え、双葉町にも多数の城館を配置しました。その1つが町指定史跡である新山城跡です。

1400年代後半、標葉氏は相馬氏そうまとの戦いに敗れ滅亡しました。以後、標葉郡は相馬氏の領地となり、江戸時代初期まで新山城には相馬氏の家臣が配置されました。

近世

江戸時代(1603年～1867年)に入ると標葉郡は相馬氏が治める中村藩領になりました。相馬氏は領地を7つの郷に分け、双葉町はそのうちの南標葉郷に属し、長塚村に陣屋が設置されました。

19世紀前半には、郡山村、新山村、前田村、目迫村、水沢村、山田村、松迫新田、石熊新田、長塚村、下羽鳥村、上羽鳥村、寺沢新田、渋川村、鴻草村、中田村、中野村、中浜村、両竹村といった村々がありました。各村には在郷給人と呼ばれる武士身分の人々が在村していました。

18世紀後半から19世紀初頭にかけて、中村藩領内では飢饉や自然災害が多発し、これにより藩内の人口は大幅に減少しました。そこで、中村藩では人口回復を図るため、北陸地方より浄土真宗門徒の移民を受け入れました。また飢饉などによって荒れた村を復興すべく、二宮尊徳の指導の下、報徳仕法と呼ばれる村の復興事業を実施しました。双葉町内では、長塚村、鴻草村、寺沢村、渋川村、中田村、上羽鳥村、下羽鳥村、松倉村、新山村、郡山村、山田村、細谷村、松迫村、石熊村の村々で報徳仕法が実施されました。

慶応4年(1868)、戊辰戦争が起きると中村藩は新政府軍と戦いました。町内では前田地区、新山城跡付近などで戦闘が行われました。

近代

明治4年(1871)、中村藩などに代わり磐前県が設置されました。明治9年(1876)には若松県、福島県と磐前県が合併し、福島県が成立しました。明治12年(1879)には、新たに標葉郡と檜葉郡ならはが設置されました。

明治22年(1889)には町村合併により、新山村(後に新山町)と長塚村が成立しました。また、明治29年(1896)には標葉郡と檜葉郡が合併し双葉郡になりました。明治31年(1898)には、常磐線が開通し、長塚駅(後の双葉駅)が開業しました。

大正12年(1923)には、県立双葉中学校(後の県立双葉高等学校)が新山町に設立されました。双葉中学校は双葉郡では初となる普通中学校で、双葉郡の教育の発展に貢献しました。

太平洋戦争(1941～1945)直前の昭和16年(1941)には、熊町村(現大熊町)と新山町にまた

がる形で、長者原に磐城陸軍飛行場が設置されました。この飛行場の敷地は日本の敗戦後に昭和34年（1959）まで塩田として利用されました。

現代

昭和26年（1951）、新山町と長塚村が合併して標葉町が誕生し、昭和31年（1956）には町名を双葉町に改称しました。

昭和36年（1961）、双葉町議会は原子力発電所の誘致を議決しました。これにより、双葉町と大熊町にまたがる塩田の跡地に原発が建設され、昭和46年（1971）から原子炉1号機の運転が開始されました。



建設中の福島第一原子力発電所

しかし、平成23年（2011）3月11日に発生した震度6強の地震と津波により、町は大きな被害を受けました。そして3月12日に発生した東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故により、双葉町は全町避難することとなりました。役場機能は、福島県川俣町、埼玉県さいたま市、同県加須市、福島県いわき市へと移転を続けました。そして、令和4（2022）年に双葉町に役場機能が帰還し、町での業務を再開しました。



震災以前の国道6号線沿いの風景

双葉町に関する主な出来事

・7世紀ごろ	清戸迫横穴墓群が造られる。
・8世紀	標葉郡が成立。
・12世紀半ば	標葉隆義が標葉郡を領する。
・14世紀半ば	標葉隆連が新山城を居城とする。
・15世紀後半	相馬氏が標葉氏を滅ぼす。
・慶長8年 (1603)	中村藩が成立。
・天明3年 (1783)	天明の飢饉。
・19世紀初頭	相馬藩が北陸地方などより真宗門徒を受け入れ。
・嘉永4年 (1851)	鴻草村・渋川村で報徳仕法が開始される。
・慶応4年 (1868)	戊辰戦争。中村藩、新政府軍と交戦し降伏。
・明治4年 (1871)	廃藩置県。中村藩領は中村県となる。
・明治9年 (1876)	福島県が成立。
・明治12年 (1879)	標葉郡と檜葉郡が成立。
・明治21年 (1889)	新山村（大正2年（1913）に町制施行）と長塚村が成立。
・明治31年 (1898)	常磐線長塚駅（後の双葉駅）が開業。
・大正12年 (1923)	双葉中学校（後の双葉高等学校）設立。
・昭和15年 (1940)	新山町と熊町村（現大熊町）に、磐城陸軍飛行場の建設が始まる。
・昭和26年 (1951)	新山町と長塚村が合併し、標葉町が成立。
・昭和31年 (1956)	標葉町が双葉町に改称。
・昭和36年 (1961)	双葉町議会在が原発誘致を議決。
・昭和46年 (1971)	福島第一原子力発電所の原子炉1号機が運転開始。
・平成4年 (1992)	双葉町歴史民俗資料館開館。
・平成18年 (2006)	双葉海水浴場が快水浴場百選に選定される。
・平成23年 (2011)	東日本大震災により、全町避難。
・令和4年 (2022)	役場機能が双葉町に帰還。

双葉町の文化遺産

文化遺産とは

文化遺産は、国や自治体によって指定・登録されている文化財だけでなく、地域に古くから伝わる歴史的・文化的価値を有する有形・無形のことを指します。例えば、博物館に収蔵されている資料群、地区で伝承されてきた祭礼や踊り、自然的・文化的な景観なども文化遺産です。

建造物・美術工芸品

町の建造物文化遺産には、旧三宮堂田中医院診療所・同煉瓦蔵（長塚、国登録有形文化財）があります。この2つの建物は、大正後期から昭和初期に建造されたもので、特に診療所は洋風の外観に和式の屋根が組み合わさった和洋折衷のデザインとなっています。

美術工芸品には、阿弥陀如来坐像（下長塚、町指定）、十一面観音菩薩坐像（目迫、町指定）があります。これらの仏像は江戸時代に製作されたもので、それぞれの地区で大事に保管されていました。しかし、東日本大震災とそれに伴う全町避難により、仏像を保管していたお堂が老朽化したために、現在は町内の寺院で管理しています。

また、郡山地区には、大熊町にある遍照寺の檀家の間で保管されてきた十三仏画（郡山、町指定）があります。これも全町避難により地区での保管が難しくなったことから、町で預かり、現在は福島県立博物館に寄託しています。

双葉町の民俗芸能・祭礼

民俗芸能とは、祭りや行事の際に、五穀豊穡や死者の鎮魂を願って演じられる舞や踊り、歌などのことです。双葉町には、神楽が各地区で伝承されています。双葉に伝わる神楽は獅子神楽で、一人または複数人が獅子の中に入り、笛や太鼓の音に合わせて舞います。このほかに、山田地区や石熊地区ではじゃんがら念仏踊りが伝承されています。じゃんがら念仏踊りは亡くなってまもない人々を弔うための踊りで、8月の盆の時期に行われます。前田・水沢地区では前沢の女宝財踊りが伝承されています。宝財踊は、相馬・双葉地域に広く伝承されている踊りですが、

前沢の女宝財踊は女性のみで構成されているところに特徴があります。



国登録有形文化財
旧三宮堂田中医院診療所



国登録有形文化財
旧三宮堂田中医院診療所・同煉瓦蔵



さんあざ
三字神楽（2023年ダルマ市での奉納）

史跡

町を代表する文化遺産として、清戸迫横穴（新山、国指定）の壁画があります。清戸迫には、横穴墓（岩をくりぬいて造った墓）が300基以上確認されており、このうち指定を受けているのは彩色による壁画が確認できる76号横穴です。壁画は、7世紀に造営されたと考えられており、大きな渦巻き紋を中心に、冠または帽子をかぶった2人の人物、乗馬している人物、動物に向け矢を射る狩猟の様子が鮮やかに描かれています。特に渦巻き紋右側で手をかざしている人物の大きさは74cmあり、これは日本国内の壁画に描かれた人物像としては最大級です。壁画の解釈は諸説あり、被葬者の一代記、鎮魂の儀式的場面、被葬者の家族などの説が唱えられています。

ほかの史跡には、新山城跡、鴻草の磨崖仏、両竹の磨崖仏があります。新山城跡は標葉氏や相馬氏によって整備された山城で、現在も当時の土塁や堀が残されています。磨崖仏とは岩肌に彫られた仏像のことで、鴻草や両竹の磨崖仏は室町時代に造られたと考えられています。

天然記念物

前田の大スギ（前田、県指定）は推定樹齢1000年以上とされる、全高40メートルを越す巨木です。言い伝えでは、浪江町請戸地区の漁師が海に出た際に、前田の大スギを目印にして、海上で船を停める場所を決めていたとされています。

しかし震災後、前田の大スギは水分不足により活力を失っていました。そこで町は、県の文化財課および文化財保護審議委員の助言を受けて、栄養剤を含んだ水を定期的に与えました。その結果、樹勢は大きく回復しました。

前田の大スギのほかに、福島県緑の文化財として、墨染めのサクラ（両竹）、観音堂のイチヨウ（上羽鳥）があります。

指定・登録文化財

双葉町内の指定文化財・登録文化財は、2024年現在、国指定が1件、県指定が1件、町指定が6件、国登録が2件です。



国史跡・清戸迫横穴 76号横穴壁画



鴻草の磨崖仏



前田の大スギへの散水作業

東日本大震災と文化財レスキューの開始

平成23年（2011）3月11日、双葉町を震度6強の地震が襲いました。これにより、建物の倒壊、さらには津波が発生し、町に大きな被害が出ました。そして3月12日午後には、双葉町と大熊町にまたがる福島第一原子力発電所で、原子炉の爆発事故が発生しました。

12日、朝から、原子力発電所の周囲10キロ圏内の住民に政府から避難命令が出されたことにより、双葉町は全町避難を行いました。最初の避難先は双葉町の北西に位置する川俣町でした。続けて、3月19日には埼玉県さいたまスーパーアリーナへ再避難し4月1日に埼玉県加須市の旧騎西高校へ役場機能を移転しました。

東日本大震災の発生後、文化庁は津波や地震によって被災した各地の文化財を救出するため、東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業（文化財レスキュー）を実施しました。しかし、福島県では、地震津波に加えて福島第一原子力発電所の爆発事故に伴い放射性物質が飛散したために、4月には原発の周囲20キロ圏内が避難指示区域に指定されました。そのため、双葉町をはじめ原発から20キロ圏内への立ち入りは規制され、本格的な文化財レスキューの実施は平成24年（2012）まで待たなければなりませんでした。

双葉町歴史民俗資料館でも、展示資料や収蔵庫に保管していた資料に大きな被害が出ました。しかし原発事故による全町避難のため、学芸員も住民対応などに追われ、文化遺産の保護に取り掛かれたのは震災から2か月が経過した5月のことでした。

まず、昆虫の標本などを資料館からレスキューしました。次に指定文化財の絵画などのカビ被害を防ぐため、温湿度管理が整った保存環境を必要とする資料をレスキューしました。

このレスキューで課題になったのが、資料の放射線量でした。平成23年当時、町民の一時帰宅の際のモノを持ち出すときの基準は、線量13000cpm以下でした。幸いにも、町の歴史民俗資料館の中にあつた資料の放射線数値は、基準の数値をはるかに下回るものでした。

また、他館の学芸員の協力を得て、資料館内にあ

る動物の剥製資料をレスキューしました。これらの資料も、線量を測り、国の持ち出し基準以下であることを一点一点確認した上で、県外へ運び出しました。

平成24年8月には、文化庁の文化財レスキュー事業として、資料館内にある土器などの考古資料や古文書類、民俗資料等の梱包作業が始まりました。梱包した資料は逐次搬出し、現在は、福島県文化財センター白河館（まほろん）に寄託しています。



双葉町歴史民俗資料館

平成4年（1992）開館。町の歴史資料の収蔵施設として、また、生涯学習の場として機能していました。令和5年（2023）廃止。



剥製資料梱包の様子

文化遺産の救出・保全

双葉町は全町避難をしたので当初、文化遺産の保護にはなかなか着手することができませんでした。特に町内にある資料は、保全していくことが難しい状況にありました。そこで、文化遺産の保全にあたっては、様々な外部組織からの支援・助言を受けて、保存・伝承に取り組んできました。

例えば、国指定史跡である清戸迫横穴壁画の記録にあたっては、東北大学からの支援を受けました。東日本大震災が起きた当時、清戸迫横穴壁画の見学施設は改修に着手したところでした。しかし、震災により、その作業を中断せざるを得なくなりました。その後、原発事故等により一般公開が難しくなった清戸迫横穴の記録保存、そして、一般の人でも壁画を見学できるように、東北大学総合学術博物館の支援を受けて、清戸迫横穴の3D測量を行い、MR映像を製作しました。MR（ミックスド・リアリティ）システムは、頭に装着するディスプレイを通して、実際にはその場にはないものを体感できる技術のことです。このほかに、東北大学とは、津波被害にあったマリーンハウスふたばの3D測量も行いました。これにより、誰でも横穴の壁画やマリーンハウスふたばの被災した内部を、ヴァーチャル体験できるようになり、平成30年（2018）には住民向けの体験企画を実施しました。

また、お堂から仏像のレスキューも行いました。下長塚地区にあった寺内前阿弥陀堂^{てらうちまえ あみだどう}には、町指定文化財である阿弥陀如来坐像が安置されていましたが、阿弥陀堂は地震被害によって大きく傾き、倒壊する恐れがありました。そこで、町では福島県被災文化財救援本部（福島県文化財課）に協力を依頼して、仏像の救出を行いました。なお現在、阿弥陀堂は解体されており、阿弥陀如来坐像は別の施設で管理されています。

町内各地区に伝わる民俗芸能の保存・伝承の支援にも取り組んできました。芸能保存団体が地区の公民館等に保管していた衣装や道具のレスキューのほか、各地区、に伝わる民俗芸能の映像化を、町民や庁内の関係各課、外部組織との調整の上で順次進めています。



寺内前阿弥陀堂における阿弥陀如来坐像のレスキュー
（平成27年6月撮影）



清戸迫横穴壁画の3D測量
（平成29年2月撮影）



上羽鳥の神楽の映像撮影
（令和元年12月撮影）

震災資料の保全

双葉町では、東日本大震災に関わる震災資料の保全にも取り組んできました。

震災資料とは、震災後に発生し、被災の実態や復興過程を物語る資料のことを指します。例えば、地震や津波に関するメモや写真、またはそれらの威力を示す物品や、双葉町民が避難生活を送る中で、各地から送られてきた支援・応援に関する物品などがそれにあたります。

津波の威力を示す資料には、双葉町消防団第九分団の消防車があります。この消防車は海沿いの浜野行政区に配備されていたもので、津波で被災する直前まで、集落の見回りに使われていました。現在は、双葉町内で令和2年（2020）に開館した東日本大震災・原子力災害伝承館にて、サビ止めなどの処置を行った上で、展示されています。

また、加須市の旧騎西^{きさい}高校には2年以上に渡って、役場機能（双葉町役場埼玉支所）が置かれました。同時に、旧騎西高校には避難所も置かれ、最大で1400人を超える町民が避難していました。

平成24年（2012）10月、旧騎西高校からいわき市への役場機能移転が決まり、同校に設置されていた避難所も閉鎖することになりました。そこで、筑波大学等の協力を得て、平成25年（2013）6月に校舎内に残っていた震災資料の収集を行うことにしました。これらの中には、国内外から寄せられた70点に及ぶ千羽鶴や、避難所生活の一端を垣間見せる様々な連絡掲示の張り紙などがあります。

この他に、旧双葉町役場庁舎や福祉施設であるヘルスケアふたば、町立双葉北小学校・南小学校、町立双葉中学校などでも、震災資料の収集・保存を行いました。また、猪苗代町内に一時開設された避難所の関連資料や、郡山市内や福島市内に設けられた仮設住宅の集会所資料も保全しました。



津波被災消防車



旧騎西高校（加須市）



双葉中学校

民間所在資料の救出・保全

双葉町では、町民が所蔵する文書・記録といった資料のレスキューも行ってきました。

個人宅のレスキューは、震災の直後から個人単位で行われていました。町として個人宅で最初にレスキューを行ったのは平成26年（2014）の鴻草地区の旧家でした。その後、歴史民俗資料館の資料などのレスキューと並行して、上羽鳥地区や両竹地区の旧在郷給人宅や、新山地区や長塚地区の古い商家から古文書等を救出しました。これらの古文書は、町の歴史的事実を知るための貴重な資料群です。

レスキューでは、様々な資料を保全してきました。例えば、新山地区の商家からは、幕末・明治期の古い本や写真、帳簿、書簡類が大量に出てきました。また、上羽鳥地区の旧家からレスキューした文書群の中には、タツノオトシゴが見つかりました。そのタツノオトシゴは、魚編に鰐うなぎに似た字が書かれた封の中に大事に包まれていました。どのような性格の資料かは不明ですが、相馬家から下賜された可能性も考えられます。

また町では、明治以降に各行政区で引き継がれてきた、行政区有文書の寄贈・寄託も受けてきました。行政区有文書は、各行政区で作成・収受されてきた文書をまとめたもので、右下の写真のような古い箱に納められて保管されてきました。行政区有文書には、共有地の管理に関するものや、役場から送られてきた文書などが含まれており、地域で営まれてきた暮らしを理解する上で、貴重な文書群です。

古文書だけでなく、過去の人々の暮らしが分かる資料のレスキューも行ってきました。例えば、昔の農具や生活道具、思い出の写真、記念物・贈答品等です。

これらの資料は、町内の施設で保管しています。また、一部の古文書類は、後述する古文書整理作業を通じて、内容の調査、リスト作成を行っています。レスキューした資料等を保存・活用していく場を作ることが、今後の町の課題です。



旧家からレスキューした資料群



タツノオトシゴ



タツノオトシゴの封紙



区有文書を収めていた箱（長塚一区）

レスキューした古文書の整理

古文書整理の作業工程

双葉町教育委員会では、2015年より、筑波大学図書館情報メディア系やふくしま・茨城両史料ネットの協力を得て、令和6年（2024）9月時点で18回の古文書整理作業を行ってきました。作業は大きく分けて、①接着しているページをはがす、②資料の汚れを落とす、③資料の内容をまとめる、④資料を整理する、の4つに分かれます。以下、主な4つの作業について説明します。

①接着しているページをはがす

古い冊子類は、湿気や虫害により、ページとページがくっついた状態になっていることも珍しくありません。そこで、1ページごとに内容が確認できるように、接着しているページをはがす作業を行います。作業は、基本的には指を使いますが、それが難しい場合は、竹串を使ってゆっくり剥がしていきます。

②資料のクリーニング

長い間蔵の中に収蔵されていた資料は、ホコリにまみれていたり、カビが生えていたりします。こうした汚れは、新たなカビや虫害の原因になります。そこで、汚れなどを、ハケを使って払い落としていきます。この作業にあたっては、作業者はマスクを着用します。マスクをするのは、ハケで汚れを払った際にホコリやカビが舞い、作業者の体内に入る危険性があるためです。また、そうした危険性を下げるために、作業にあたっては、ドライクリーニングボックスという^{しゅうじんき}集塵機を使って作業を行うようにしています。

③封筒入れと番号付け

クリーニングした資料は、番号付けをして、中性紙製の封筒に入れて保存します。番号は目録用紙および中性紙の封筒に書き込みます。資料の保存に中性紙を用いるのは、資料の劣化の要因となる光やホコリ、酸性環境などから資料を守るためです。



ページをはがす作業



資料のクリーニング



資料を中性紙の封筒に入れる作業

④資料内容を目録カードに記述する

資料の番号付けをした後は、それがどのような内容なのかを調べる作業に進みます。資料は手紙であったり本であったりと様々ですが、古い資料では崩し字で書かれていることが多いため、読み解くには専門的な知識や経験が必要になってきます。複数人で古文書の辞典を使いながら、作業を進めていきます。読み方が分からない文字や、知らない地名などが出てきたときは、お互いに相談し合います。

なお、初めて古文書を読む方でも、古文書を読める参加者から聞きながら作業ができるので、初心者でも参加できます。いつ作成された文書(本)か、作成者や受取人は誰か、どのような内容が書かれているのかなどを読み解きながら、専用の目録カードに記載していきます。

⑤資料撮影

リスト化が終わった資料は、中性紙封筒という文書の保全に適した専用の封筒に入れて、さらに中性紙箱という専用の箱に保管します。最後に、保管された資料をカメラで撮影することで、これで資料の整理がひととおり終わります。



古文書整理作業の様子



整理が終わった資料の撮影

文化財レスキューをささえる史料ネット

全国の被災地では史料ネットと呼ばれる団体が文化遺産の救出を支援しています。史料ネットは歴史資料取り扱いの専門集団で、支援ボランティアを全国に呼びかけ、被災した方々とともに資料を救出し、傷んだ資料へ保存処置を施し、目録作成などに協力します。最初の史料ネットは平成7年(1995)阪神・淡路大震災の際に兵庫県神戸市で結成された歴史資料ネットワークです。いま全国で約20団体が活躍しています。

双葉町ではふくしま史料ネット(ふくしま歴史資料保存ネットワーク)と茨城史料ネット(茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク)が活動しており、現在は救出された歴史資料の目録作成を町民の方々や各地から集まったボランティアと一緒に続けています。初心者にも分かりやすく対応するので、興味をもった方は気軽に御参加ください。

保全活動のこれから

救出された被災文化遺産

救出された被災文化遺産等は大きく二つに分けられます。一つは、町内の旧家に伝えられた近世の古文書です。例えば、相馬中村藩の中小家臣で領地に暮らした在郷給人の子孫の家には、藩の支配に関する江戸時代の文書が残されていました。最も古いものは、開発された畑を現地の在郷給人の新しい領地として認めた寛文8年（1668）の知行宛行状です。また藩主から賜ったのではないかと想像させるタツノオトシゴも見つかりました。

もう一つは、地区の集会所などで管理してきた近世から現代にかけての歴史資料です。一般に地区の集会所は近代以前の神仏を祀るお堂を建て替えた事例が見られ、宗教的な遺物を伝える場合があります。双葉町でも江戸時代末期の鰐口（社寺の正面に吊り下げられた銅製の打金）が確認されました。また、区有文書（地区の運営に関する文書資料）は、歴代の区長が地区の取り決めや会計帳簿などを持ち回りで管理してきたものです。地区の住民にとっての身近な資料というだけでなく、保管用の箱（文書タンス）そのものも貴重な資料です。

今回の救出活動で初めて確認された記録や資料も少なくありません。今後、これらの資料の調査分析を進めることで、町の歴史や文化が新たに発見されることが期待されます。

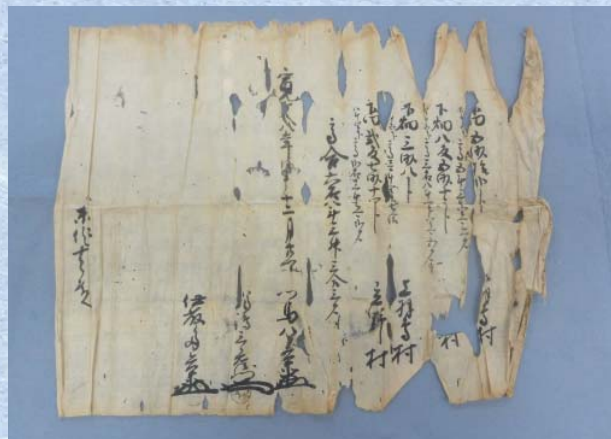
保全された震災資料

震災資料は、双葉町内で地震発生日の3月11日の夜から全町避難指示が出された3月12日までの間に町内で作成・収受された資料と、町外に設置された避難所や仮設住宅で保管されていた資料の、大きく二つに分けられます。

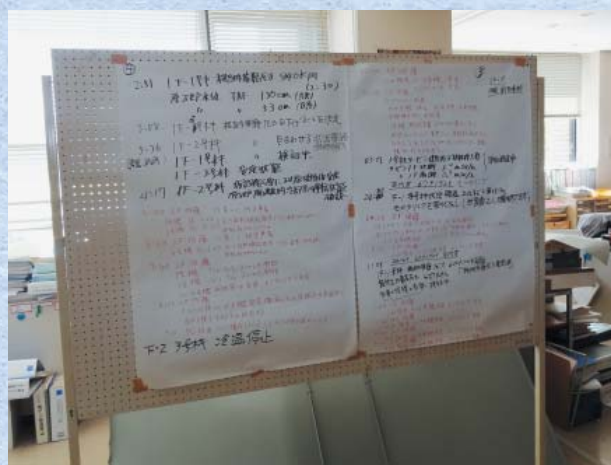
一つは、双葉中学校、双葉北小学校、災害対策本部が置かれた町役場本庁舎、町民向け炊き出し本部が置かれたヘルスケアふたばなど、地震当日に設置された避難所等の資料です。この中には、原子力発電所や県庁からの情報を書き留めて本庁舎内で掲示した模造紙や、双葉中学校避難所の受付資料があります。

もう一つは、旧埼玉県立騎西高校校舎に置かれた

町役場支所や避難所での生活関係資料や国内外からの激励・支援の品です。これらの一部の写真は筑波大学が開設したホームページで見られます。また、マイクロタスク型クラウドソーシング技術を用いて、世界中の人々が自分の言語で資料に名前を付けるシステムを作りました。今後もこのような情報システムを活用して、双葉町の過去や現在を発信していくことが望まれます。



寛文8年の知行宛行状



原子力発電所などの情報を記録した模造紙



ホームページ
「福島県双葉町の東日本大震災アーカイブズ」

現場からの声

東日本大震災が起きてからの14年間、多くの人たちが双葉町での古文書や震災資料のレスキューに携わってきました。このページでは、そんな携わってきた人たちの声を紹介します。

朝川 美幸（仁和寺学芸員、双葉町出身）

双葉高校の恩師に「もしも災害が発生した時、自分に何が出来るか考えておくように」と言われた事がきっかけで「私が出来る事は町の歴史を残す事」だと思い、この活動に参加しています。この作業は一見地味に見えますが、五十年、百年先の双葉町の人々に歴史を継承する重要な作業です。また毎回新しい発見があるので、いつもわくわくしながら参加しています。このわくわく感を皆さんと共有したいと思っています。ですので、町の歴史を話したい方、どのような作業をしているのか興味がある方など、気軽に保全活動の場に来ていただきたいと思います。たくさんお話し聞かせてください。

泉田 邦彦（石巻市博物館学芸員、双葉町出身）

小学生のとき、双葉町歴史民俗資料館が主催するイベントには、両親や姉弟と参加し、土器づくりや古代米づくりを体験してきた。私にとって、双葉町や地域の歴史は身近に存在するものであり、そういった体験があったからこそ、現在は博物館の学芸員として仕事をしているのだと思う。東日本大震災以降、双葉町など原発事故被災地で「資料レスキュー」に携わり、双葉町教育委員会が主催する古文書整理作業にも参加している。被災地支援という面はあるにせよ、古文書を読み解くことで、地域の歴史が明らかになることは何よりおもしろい。研究仲間だけでなく、父や同級生と一緒に作業をするなかで、町の歴史を共有する輪が広がっていくのはとても嬉しいものである。

武子 裕美（茨城県立歴史館学芸員）

元々経営学部でサービスマーケティングを勉強していましたが、現在や未来のモデルを考えるには過去のことを学ばなければならないと思い、経営学部卒業後史学科に編入しました。日本近世史を専攻したので、古文書を読めるようにならねば、と古文書読解の勉強を始めました。2011年東日本大震災が起こり、被災地に何か協力が出来たら、古文書の勉強をしていたので、古文書を救う活動が出来ればと考えていました。そこで双葉町のレスキューの話があり、活動に参加させていただいています。双葉町の古文書は、自宅で大切に保管されてきたことがよく分かるものがあり、レスキューを行えてとてもよかったと思っています。また、私自身も古文書から学ぶことが多く、今後もしもできる限り古文書を残す作業のお手伝いができればと思っています。

吉野 高光（とみおか・アーカイブミュージアム学芸員、元双葉町学芸員）

平成23年4月、原発事故に伴い全町避難を余儀なくされたため歴史民俗資料館の資料は管理できない状態にあった。保存、盗難の危機感があったため、古文書の一部などを福島県立博物館に仮保管していただくことができた。平成24年4月には県内外の自然史系博物館の協力をいただき、剥製標本のレスキューを独自に行った。同年8月からは文化庁を中心とする全国の博物館等の協力をいただき歴史民俗資料館資料のレスキューが本格化した。現在は、旧相馬女子高校への移送を経て福島県文化財センターまほろんの仮収蔵庫に保管されている。その後、指定文化財や民間資料のレスキューにシフトしている。展示をとおして町民共有の財産が双葉町のアイデンティティーを伝えるとともに交流人口の増加に寄与することを願っている。

文化遺産・震災資料のレスキュー年表

- ・平成23年(2011) 3月 東日本大震災。全町避難。
7月 町歴史民俗資料館から所蔵資料の一部を救出。
- ・平成24年(2012) 8月 文化財レスキュー事業による双葉町歴史民俗資料館収蔵資料の梱包作業(搬出作業は2012年9月5日に実施)。
- ・平成25年(2013) 6月 「福島県双葉町教育委員会と筑波大学図書館情報メディア系との震災関係資料の保全及び調査研究に関する覚書」を締結。
6月 双葉町役場埼玉支所及び旧騎西高校避難所の震災資料保全作業を実施。
- ・平成26年(2014) 6月 双葉中学校旧校舎の避難所跡調査及び資料保全。
- ・平成27年(2015) 3月 町内の旧家より文書資料を救出。
9月 保全された被災資料の整理作業(第1回)を行う。整理作業は現在まで年2回のペースで継続。
- ・平成28年(2016) 5月 文化財レスキュー事業による双葉町歴史民俗資料館収蔵資料の搬出作業が完了。
- ・平成29年(2017) 2月 清戸迫横穴の3次元測量を行う。
6月 国立台湾歴史博物館特別展にて、双葉町の震災資料を展示。
- ・平成30年(2018) 3月 清戸迫横穴3次元映像のVR体験会を実施。
- ・令和 2年(2020) 1月 東日本大震災・原子力災害伝承館開館。
- ・令和 3年(2021) 3月 ヘルスケアふたば、旧双葉町役場庁舎内にて震災資料保全作業を実施。
- ・令和 4年(2022) 8月 双葉町役場新庁舎開庁式を実施。

【協力者・協力機関等】

ふくしま歴史資料保存ネットワーク(ふくしま史料ネット)
茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク(茨城史料ネット)
公益財団法人福島県文化振興財団
福島県立博物館
東北大学総合学術博物館

科学研究費補助金基盤研究(A)「現実世界と電子世界の融合で被災地復興に寄与する次世代MLA」(課題番号22H00011)(研究代表者 白井哲哉)

科学研究費補助金特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」(課題番号19H05457)(研究代表者 奥村弘)

朝川美幸 今村樹重 泉田邦彦 牛米努 川上真理 阪口哲男 相樂比呂紀 武子裕美 橋本直子
森嶋厚行 吉野高光

【参考文献等】

阿部浩一・福島大学つくしまふくしま未来支援センター編『ふくしま再生と歴史・文化遺産』、平成25年、山川出版社
白井哲哉『災害アーカイブー資料の救出から地域への還元まで』、平成31年、東京堂出版
白井哲哉編『2018年度国内フォーラム報告書 フォーラム「福島の震災遺産と震災アーカイブズの構築」』、平成30年
福島県双葉町編『双葉町東日本大震災記録誌 後世に伝える震災・原発事故』、平成29年、福島県双葉町
双葉町史編さん委員会編『双葉町史 第一巻 通史』、平成7年、福島県双葉町
双葉町史編さん委員会編『双葉町年表』、平成9年、福島県双葉町
南相馬市教育委員会文化財課市史編さん係編『原町市史 第一巻 通史編Ⅰ「原始・古代・中世・近世」』、平成29年、南相馬市
ホームページ「福島県双葉町の東日本大震災アーカイブズ」<https://futaba-archives.slis.tsukuba.ac.jp/>

双葉町の歴史を救う、守る、伝えるー双葉町文化遺産保全活動・12年の記録ー 令和7年2月28日
双葉町・双葉町教育委員会/筑波大学図書館情報メディア系
連絡先:双葉町教育委員会生涯学習課 0240-33-0206
製作:株式会社 鹿島印刷所

【表紙写真】

(上)上羽鳥地区での古文書レスキュー (左下)古文書整理作業の様子 (右下)国立台湾歴史博物館に展示された支援品